

日本心理学会第76回大会シンポジウム「動物実験研究の意義と将来－基礎から応用，隣接領域まで－」の開催について

澤 幸祐

日本心理学会は，本邦の心理学会の中では最も広い分野をカバーする学会であり，その年次大会は3,000名ほどの研究者が参加する大きな大会であるが，本年は本学が主催校となって生田キャンパスにおいて開催された。大会においては，本プロジェクトの後援を受けて「動物実験研究の意義と将来－基礎から応用，隣接領域まで－」と題するシンポジウムを開催したので報告する。

本シンポジウムは2012年9月11日に開催され，プロジェクトの目的のひとつである「ヒトと動物の連続性」という観点から動物実験研究の現状を概観するとともに，プロジェクトのもうひとつの目的である「基礎研究と臨床研究の連続性」という問題を扱うために動物実験を基礎研究のために用いている研究者と，臨床精神医学といった応用研究のために用いている研究者に講演を依頼した。

動物を用いた実験は，心理学領域の中では古くから用いられてきた方法論であるが，それには様々な理由が存在する。第一の理由としては，ダーウィンの進化論などに裏打ちされた「ヒトと動物の連続性を踏まえた種間比較研究によるヒトと動物の共通点および相違点をあぶりだす」という論点が挙げられる。大阪教育大学の石田雅人先生には，こうした観点から様々な比較研究の歴史および先生ご自身の研究をご紹介いただき，動物研究が果たしてきたこれまでの役割について論じていただいた。動物研究を行う第二の理由として，人間では行うことのできない侵襲的な研究が可能であることが挙げられるが，関西学院大学の佐藤暢哉先生には神経科学的研究と心理学的研究の両面から動物実験の意義を講演いただいた。特に，サルを用いた単一細胞記録による空間認知研究についてご紹介いただき，「メカニズムを知るための手法としての動物実験研究」の意義を取り上げていただいた。最後に，東北大学の曾良一郎先生からは，精神医学的な応用のために動物実験研究がどのような役割を果たし得るかについて，統合失調症などの例を挙げながらご講演いただいた。指定討論には玉川大学の鮫島和行先生，東北大学の筒井健一郎先生をお招きし，各講演者への質疑などを行って動物実験研究が心理学において今後どのような展開が可能かについて様々な議論を行っていただいた。

動物研究がこれまでの心理学において歴史的に果たしてきた役割については，議論するまでもなく大きなものがあることは明らかであるが，現在の学界においては決して大きな位置を占めるという状況にない。先に述べたような動物実験の利点に加え，人間では行うことが困難な厳密な実験統制が可能であることなど，他にも多くの利点が存在する。にもかかわらず，現状決して多

くの研究者が動物研究を行っていないことには理由があるはずであり、それはフロアからの意見としてあがった「心理学における動物研究は蜻壺に陥っている」という点にも反映されていると思われる。今後、動物実験研究がどのように発展していくのか、人間理解に対してどのようなインパクトを与えることができるのかについては議論していく必要があるだろう。